松原田中遺跡

まつばらたなかいせき

今年度の調査が終了！ 今年最大の調査成果は？

松原田中遺跡全景（東から）

11月末をもって、今年度の発掘調査が終了しました。これまでにご紹介したとおり、今年もいろいろな発見がありました。

そのうち、最も大きな成果は、松原田中遺跡の集落域が明確となったことです。調査の結果、遺跡の東側にあたる4-1区の西端には自然流路があり、西側にあった集落からたくさんの土器などが投げ込まれていました。その東側は遺構・遺物ともに希薄な、じめじめした低湿地状で、時折水が流れ込むといった環境下にあり、古代の人々による積極的な土地利用は行われなかったようです。こうしたことから、松原田中遺跡は、東西およそ70mの幅で南北方向に延びる微高地上の比較的狭い範囲に集落が営まれていたことが分かりました。

発掘通信

一段と寒くなりこたつや蜜柑の恋しい季節となりました。いよいよ今年度の発掘調査も大詰めです。

雨にも負けず吹雪にも負けず職員一同元気に現場作業を進めていきます。今後もさらに調査の成果を本誌およびホームページにて公開していきます！お楽しみに！！

鳥取県教育文化財団　調査室　検索

（公財）鳥取県教育文化財団　調査室

〒680-1133　鳥取市源太12番地

TEL：0857-51-7553　　FAX：0857-51-7550

メールアドレス：tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP：http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu new.htm

鳥取西道路の遺跡を掘る！

第68号　2014年12月22日

農作業に使う道具はいろいろありますが、今回は、大昔の人々が農耕に使いはじめた農具で、「大足」という道具についてお話しします。

①	大桷遺跡	（鳥取市大桷地内）	⑤	常松大谷遺跡	（鳥取市気高町常松地内）
②	高住牛輪谷遺跡	（鳥取市高住地内）	⑥	常松菅田遺跡	（鳥取市気高町常松地内）
③	高住宮ノ谷遺跡	（鳥取市高住地内）	⑦	下坂本清合遺跡	（鳥取市気高町下坂本地内）
④	松原田中遺跡	（鳥取市松原地内）			

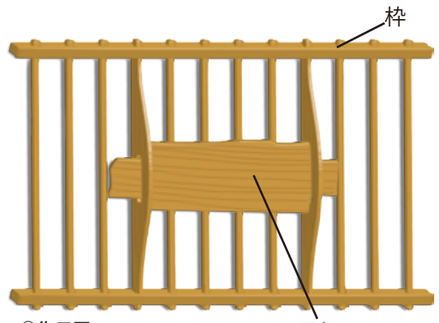
弥生時代から続く大足

「大足（おおあし）」ってご存知ですか？ぬかるむ田んぼで農作業の時に履（は）いて使う農具です。「方形枠付き田下駄（ほうけいわくつきたげた）」とも呼ばれ、弥生時代以降近代に至るまで、全国各地で農作業に使われていたことがわかっています。近代頃の農家では苗代（なわしろ）に肥料を踏み込むために使われていました。

①出土状況…本来足を置く面が裏返しになっている

松原田中遺跡では、今年度の調査で、古墳時代頃の大足が裏返しになった状態で出土しました（右図①）。大きさは、長さ89.4cm、幅49.8cm、厚さ3.8cmでした。

大足の仕組みは、格子状に木材を組んで、真ん中に足を乗せる「足板」を固定します（右図②）。枘（ほぞ）穴に差し込んだ木材は、木製の楔（くさび）で固定して抜けにくくしてあることがわかりました。



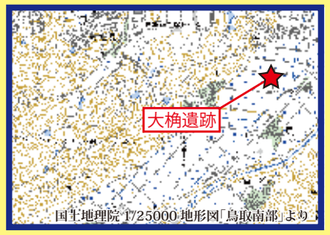
②復元図

大足は、たくさんの木材を使って枘穴結合で組み立てるので、頑丈で大きくて重くなります。この大きさと重さは、田植え前の耕土を攪拌（かくはん）し、水平にならすことに適していました。近代の農家での大足の使い方等を参考にすると、弥生時代以降の遺跡から出土するものも同じ使い方だったのではと想定されます（右図③）。

弥生時代の人たちが培った農業の伝統が、最近まで引き継がれてきたことに驚きを覚えます。

③使用復元図

大桷遺跡
だいかくいせき



身分証落としちゃった！？

前号までにお伝えしてきた平安時代（約 1,200 年前）の屋敷地と川ですが、ようやく調査が終わりました！みつかった建物は、全部で 24 棟以上。真上からみてみると川の西側に建物群が密集する様子がよくわかります（写真①）。

建物からみつかった遺物のうち、面白いものとして金属製の帯飾り（写真②～④）がありました。この帯飾りは、当時の偉い人の大事な身分証のようなもの。無くした人もきっと大慌てしていたのではないでしょうか (+o+)。

写真②
柱の穴から見つかった様子

写真③
柱の穴から見つかった様子

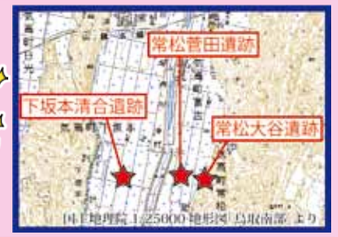
柱を据える穴からみつかった巡方という四角い帯飾りです（写真②）。裏面にはベルトにつけるための小さな穴が４つありました。金属の鈍い光がまぶしい逸品です（写真③）。大きさは約 2.5 ㎝。表の面には黒い漆が塗られています（写真④）。

写真④
ひっくり返すとこんな感じ

さて、現在１－１区では、古墳時代（約 1,600 年前）の地面の調査にとりかかっています。雪が降る前になんとか目処をつけたいところですが、地層の断面で見る限り、古墳時代の地面にもたくさんの遺構がありそうな予感（；_；）。どんな発見があるのか今からワクワクします。詳細は次号にて！！

調査区を真上からみた様子。上が北です。
黒い点はほぼすべて建物の柱を据えた穴です。

常松大谷遺跡 & 常松菅田遺跡
つねまつおおたにいせき　つねまつすがたいせき



調査完了しました（˘▽˘）/

常松菅田遺跡では、調査終盤に弥生時代中期～古墳時代前期の谷の掘削を行いました。そして調査最終日には、ラジコンヘリコプターで空から写真を撮り、現地調査を無事終えることができました。

調査が終了した時の現地を見ると、現在の平坦な地表面からは想像し難いほどの、地形の起伏の激しさに圧倒されます。この変化に富んだ地形のうち、低い所は谷や溝、一方高い所はムラや玉作工房として利用されていました（写真１・２）。その後この起伏は、川から溢れた土砂や人々による開墾などによって埋まり、2,500 年の歳月を経て現在ののどかな風景へと変ぼうしたのです。最後まで調査しなくては到底わからなかったこの常松地区の地形の移り変わりを、しみじみと実感することができました。

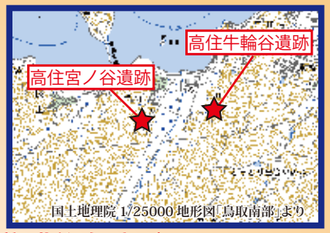
これで、２ヵ年にわたる常松大谷・常松菅田遺跡の現地調査は完了しました。これからは屋内で、それぞれの遺跡の整理作業を進めていきます（＾＾）

調査前の常松菅田遺跡

弥生～古墳時代の溝・ムラ
（昨年度調査区）

弥生～古墳時代の谷
（今年度調査区）

高住宮ノ谷遺跡 & 高住牛輪谷遺跡
たかずみみやのたにいせき　たかずみうしわだにいせき



こんなものが出ました！　～「土製支脚」～

高住宮ノ谷遺跡からは、「土製支脚」の破片が多く見つかっています。中には、ほぼ完全な形のものもありました（写真）。土製支脚は、下図左のように使われたと考えられる土製品です。鳥取西道路関係の発掘調査によって、これまで出土例が少なかった県東部での発見が相次いでいます。ちなみに、今回見つかったものは県西部から島根県東部にかけて多く見られる形です。

ところで、当遺跡では下図右のような土製の「移動式カマド」の破片も多く見つかっています。土製支脚と移動式カマド、どちらも煮炊きに使う、という同じ目的のために使われたものです。２種類が見つかっているのには理由があるのでしょうか。

考えられる理由として、使用方法による「使い分け」があげられます。また、別の理由として「時期差」も考えられ、炊事道具の移り変わりを示す可能性があります。今後、遺物の詳細な時期を検討し、答えを導き出せれば、と考えています。

先が欠けていますが、「Y」字状に三叉に分かれた形です。

土製支脚（左）と移動式カマド（右）の使い方（想定）

下坂本清合遺跡
しもさかもとせいごういせき

土嚢で補強しながらの掘削

井戸掘りはつらいよ…！

3-1 区で、鎌倉時代以前のものと考えられる井戸の跡が出現しました！木製の井戸枠が残っており、四隅に柱を立て、各辺に立て並べた何枚もの板を横向きの桟で固定して作られていました。

きれいな形の井戸が現れて担当者も感激したのですが、じつはこの井戸が埋まっていたのは砂の中。掘れば掘るほど壁が崩れて一筋縄にはいきません…！土嚢でまわりを押さえながらの掘削で、作業員さんも大変！記録をとる間も砂は崩れ、一刻一秒を争う調査となりました！

かつてこの井戸造りに携わった人々も、掘るそばから崩れる砂と戦い、大変な思いをして井戸を完成させたのでしょうね。

昔の井戸掘り職人たちの魂が見守ってくれていたおかげか、井戸の調査を無事終えることができました＾＾

木製の井戸枠が出現！